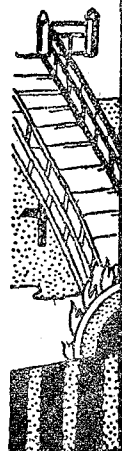




史料



徳川時代の道路及道路附屬物史物語

〔中〕

——一里塚・並木——

渡部 英三郎

目次

- 一、一里塚と並木の印象
- 二、一里塚
 - (1) 一里塚築設の時期
 - (2) 一里塚の定型
 - (3) 塚上の榎
 - (4) 塚及榎の保護
 - (5) 一里塚間の距離
 - (6) 一里塚築設の目的
 - (7) 千葉縣の一里塚址保存施設

三、並木

- (1) 並木の起原
- (2) 中古及近古の並木
- (3) 徳川時代の並木

一、一里塚と並木の印象

道路の風致問題が道路行政の關係者や、其の研究者の間に一つの關心事となり、且つ種々の視角から論議せられつゝある今日、徳川時代に於ける道路の風致と密接な關係を有つた並木と一里塚との歴史を探ることも興味深いであらう。

勿論、當時に於いても並木や一里塚は、路邊に風致を添

へることを唯一の目的として設けられたものではなく、後にも述べるであらうやうに、謂はどもつと實質的な目的を有つたものではあるが、然しそれが旅する人々の眼前に美しい景色を展開して、疲勞を癒やし、退屈を緩和する効果をも有つたことは明かである。

永き日や牛の涎の一里塚

一茶

蟬なくや古郷に近き一里塚

愚水

かつこ鳥板屋の背戸の一里塚

越人

俳人達が春の日長に旅しては、行く先々の一里塚に旅情を慰め、塚の上に鬱蒼と茂つた榎樹の葉蔭に鳴く蟬の聲を聞いては既に間近き故郷を懐しんだ情景が偲ばれよう。

くたびれた奴が見付ける一里塚

一里塚西瓜の皮のすべる所

これはユーモリスト等の眼に映じた一里塚の姿であるが兎に角旅する者にとつて一里塚が一つの關心であり慰めであつたことが窺はれよう。塚の邊りに西瓜の皮などが捨てられてあつたところを見れば、幕府の末期近い頃になつて

からも殊に夏などには、往還の旅人が、枝を擴げた榎樹の下で涼を入れ、疲れを休めたことであらう。

一里一里に榎を植えてナア!

あとの並木にや松と杉 (1)

當時雲助共が籠をかついで、息杖で調子をとりながら唄つた唄であるといふが、心なき彼等にまで、松や杉の美しい影を路上に投げながら續いてゐた並木や一里毎に塚の上に鬱蒼と繁つてゐた榎が、詩情を誘つたことであらう。

註 (1) 榎畑雪湖氏「江戸時代の交通文化」

それはまた外國の旅行者等の眼にも映じたものと見え前號で掲げたやうな外國使臣等の江戸參府旅行記などにも、道中觀察の主なる對象の一つとなつてゐる。例へば元祿年間長崎から江戸へ往還したケンペル(ケンペルにつきては前號參照)は……西海道の一部、東海道に於いてはそれに添へる都市村落を除くの外は、大抵道の兩側に間隙なく、又眞直ぐに並びたる松の並木ありて、日の蔭をなし、又旅人の慰安となる。(1)

といつて並木の情景を述べてる。

北海道の一部分と東海道とに限定してゐるのは彼が他の諸街道を旅する機會を有たなかつたがためであつて、それによつて他の街道に並木がなかつたと考へるならば、誤りであることは後に述べる所によつて明かであらう。然しこれによつて、並木は都市村落の中をも貫くものではなく、其中にのみ設けられてあつた事實及び西海道等に在つては並木が街道筋全部に亘つて並んでゐたのではなく、其一部分にのみ設けられてあつた事實等が知れるであらう。

また一里塚に就いては、

……里標は相對する二つの小邱を用ひ路の兩側に堆高くし、頂上に樹木一株又數株を植えたり。(2)

と記してゐるが、一里塚が塚一つを以つて形成されてゐたものと考へてゐる人々などにとつては其誤りを匡す一つよき資料であらう。

註(1) 「ケンペル參府記」

(2) 「同上」

慶長年間に江戸から駿府に立ち寄つて家康に謁し、更に京・大阪を経て長崎まで旅を續けたドン・ロドリゴ(ドン・ロドリゴに就いては前文參照)の眼にも一里塚と並木が美しい存在として、また便利な施設として映じたものと見え、

……道路の兩側には松の並木ありて愉快な蔭を作り、通行者の太陽に苦しめられること甚だ稀なり。

又里敷を尋ねる必要なからしめるために之を測り一レグワ(里)の終る所には小山一つと二本の榎を置けり。

1)と記してゐる。小山一つと云つてゐるのは疑問であるがそれについては後に觸れる機會もあらう。

その他これも慶長年間に長崎から江戸への往復をしたジョン・サリスの旅行記にも(サリスに就いては前文參照)

……一里毎に道の兩傍に二つの小邱あり、その頂には松の木を植え、手を加へて亭の形をなせり。(2)

と記し。また、ずつと後代の文政年間にこれも長崎江戸間を往來したシーボルト(シーボルトについても前文參照)の紀行文にも、
……日本の里程標は多く道の兩側に堆くされたる小邱に

して其の上には松又は東洋の楡を植えたり、これを一里塚と云ふ。それより小き距離は町にて數へ、石に刻み又は堺杭、道しるべに示すなり。(3)

等とあるに徴すれば、當時一里塚と並木が旅する人々の眼に、珍らしい存在として、また時には美しき情景として映じた有様が窺はれる。

「註」(1)「ドン・ロドリゴ日本見聞録」

(2)「サーリス日本旅行記」

(3)「シーボルト江戸參府記」

二、一里塚

(1) 一里塚築設の時期

一里塚の築設された時期については種々の説がある。

例へば「柳菴隨筆」には、

一里塚・信長記云、天文九年冬(一五四〇)將軍家に諸國へ仰せありて、四十町を一里とし、いちりゅうが里塚の上に松と楡を植えらる。(1)

と記し、また「江源武鑑」には、

天文十九庚戌年(一五五〇年)十二月五日、將軍家諸國の守護に仰付けて、四十町を一里と定め驗しに大塚をつくべきよしを仰せ下す。五畿七道へ奉行をくだす。(2)

と記し「箕輪年記」には、

永録四年(一五六一年)長野業政が病死せし時、我死せば一里塚同じに、つきこめ、塔婆をも立つべからず……と遺言して死んだと記してゐる。3)

次に「海録」は一里塚の起原を信長に歸して、

「元龜元年庚午(一五七〇年)近江の國安土より都迄一里塚を築き、道のふちに松をうへ申候、是一里塚の初也。(4)

と云ひ「武徳編年集成」には

天正に織田信長分國の中一里塚を築かしむ。(5)
とある等、一里塚築設の時期に關する説は極めて多岐に亘つてゐる。

「註」(1)(2)(4)及(5)「經濟史研究第十一卷五號」

(3)「經濟史研究十一ノ五」・岡山縣通史」

以上は何れも一里塚が室町幕府の末葉から信長の時代にかけて、築設せられたものとする説であるが天文年代頃は

幕府の威信全く地に墜ち群雄各地に割據して、侵略・戰鬪に寧日なき時代である。斯様な時代に單に將軍の虚位を保つに過ぎない。足利義晴や、義輝などが、諸國に合して交通

上の施設をなさしめたなどは考へられない。殊に天文十九年に、一里塚を築設するために五畿七道へ奉行を下したなどといふ記事は當時の政治事情と到底兩立し難い。海録」の記する所に至つては其の誤謬が最も明かである。若し假りに信長が近江の安土から京都に至る間に一里塚を築いたことがあるとすれば、それは安土城が築かれ、そこが信長の政治的中心地となり、隨つて安土・京都間が彼の天下經略上、重要な通路となつた以後のことでないならばならない。然るに元龜元年は、安土城の築城工事が着手される以前であつて、その築城工事は六年後の天正四年(一五七

六年)のことに屬し其完成は天正七年のことに屬する。それのみならず、元龜元年は信長が徳川家康の援軍を得て、

越前の朝倉、近江の淺井と共に兵馬馳驅の間に見え、多事多端を極めてゐた年でもある。

「武徳編年集成」の天正年間に信長が其分國(領地)内に一里塚を築いたといふ説であるが本能寺の變が天正十年であるから、若し天正年間に一里塚を築設したとすれば、それまでの十年の間に於いてである。その間は信長の最も多端な時代であつて、淺井、朝倉二氏の討滅、將軍義昭の追放、強敵武田氏との抗爭、本願寺征伐等々殆ど寧日のない時期ではあるが、然し、是れ等のことは信長が領内に一里塚を築いたといふ記事を全然否定する理由とはなるまい。軍勢を進める上の便宜等から領内の里程を明かにして置くことも必要であつたらうし、武將であると共に治民の方面にも力を注いでゐた彼のことであるから、そうした方面に全然手を延ばさなかつたとは斷じ難い。けれ共信長が此時代に一里塚を築いたとしても、それは限られた區域に於い

てどあつて、徳川時代に於けるやうに全国的に亘つてゐないことは明かである。随つて徳川時代に於いて外國の旅行者の見聞記などに現はれてゐるやうな略々一定の様式で、全国的に築設されてゐた一里塚が、信長時代に起原せるものではないことは明かである。

次に秀吉時代に起原したといふ説は、

秀吉公御代に繩を御はらせ、三十六町を一里と御定め、塚を一里ごとに御築せ候。

と記せる「見聞集」などに見出されるが、全国的な検地を實行した程の秀吉であるから軍事上、政治上または其の他の必要等から、そうした交通施設等にも手を觸れなかつたと一概に断定はし難い。



然しそれが如何なる動機に因るかまた、如何なる様式で、

何れの地方に築設されたかも明かでないし、築設の年代も明記されてゐない。随つて一里塚が秀吉の時代に起原することを多少でも確信を以つて断定するにはあまりに不確實な資料であることを免れない。

一里塚址

次に家康の築設に成るといふ説に就いてゝあるが、左掲の文書などは一里塚が信長、または秀吉の築設に成つたとする説を極力否定して家康の施設に歸してゐる。

一里塚、大道中路凡てこの塚あり、三十六町にして道路の左右に必ずその塚を置く。墳古くは一里山とも云ひしにや、近寶路

程記には一里山とあり。此塚を初め置かれし時代に諸説多し。一に云信長の時代なり。一に云秀吉の時代なり皆非なり一に神祖の時代なり。(1)……

左に家康の築説とする諸説の二、三を掲げる。

二月四日(註)慶長九年右大將殿の命として、諸國街道一里

毎に塚塚(世に一里塚といふ)を築かしめられ、街道の左右に松

を植えしめる。東海、中山兩道は永井彌太衛門白元、

本多左太夫光重、東山道は山本新五左衛門重成、米津

清右衛門正勝奉行し、町寄年樽屋藤左衛門、奈良屋市

右衛門もこれに屬してその事をつとめ大久保石見守長

安之を總督し、其外公科は代官、私領は領主沙汰し五

月に至つて成功す。(2)……

慶長九年二月四日、江戸より諸方への道中筋に一里塚

を築かしめらる。大久保石見守是を奉行す。同年五月

下旬悉く出來。(3)

慶長九年是歲、東海、東山、北陸の諸街道を修理し始

めて一里塚を築く。(4)

慶長九年東海道、東山道、北陸道一里塚奉行永田勝左衛門重眞被_二仰付_一

就_二路中一里塚申付_一太田勝兵衛、永田勝左衛門差遣候

何れ之知行方内たりと云共、彼奉行次第人足可_レ出_レ之

者也。(5)

〔註〕(1)「新編常陸國誌」

(2)「東照宮實記」

(3)「落穂集」

(4)「大日本史料」

(4)「永田幾三郎家傳」

(朝野舊聞叢稿)五百七所載

以上は何れも一里塚を慶長九年(一六〇四年)に家康が

築設せるものとする説であるが、其外にも「上杉年譜」「求

麻外史」「當代記」「創等記考異」「一話一言」等は、築設の

月に於いて或は八月とし、或は十二月とする等の小異はあ

るが、慶長九年説を主張してゐる。(1)

〔註〕(1)濱村正三郎氏「一里塚と並木」(經濟史研究)二一五掲載

慶長九年と云へば前文にも言つたやうに、關ヶ原の役後

足掛け五年に當り、既に豊臣氏は事實上、大阪を中心とす

る一平大名の地位に落され、政權が徳川氏に歸屬した頃で

あつて、翌年の慶長十年には秀吉の朝鮮征討以來杜絶して

るた朝鮮との交通が再び開かれる等のことがあり、家康が内外に亘つて平和的施設の建設に努めてゐた當時である。それ等の事情を考へ、また、これも前文で「慶長見聞録」の記する所を引用して述べたやうに、其年は家康が戦國時代から荒廢の儘に委せられてゐたであらう各地の道路、橋梁を、五畿七道に亘つて改修し、全國的な道路工事を執行した年であり、且つ同時に一里塚を築いたとも明記してある點等から考へ一里塚の全國的築設の時期は前掲せる多くの文献が記してゐるやうに、慶長九年と推定すべきであらう。信長や秀吉が類似する里程の目標を築設したことがあつたとしても、それは前述の如く限られた範圍に於いてであつて、家康が江戸日本橋を中心として全國的に築いた一里塚とは別箇のものであらう。随つてそれは江戸時代に一定の様式に於いて重要な街道の兩側に在り、そして前に述べたやうに、外國の旅行者等の觀察の對照となつた一里塚とは恐らく無關係であらう。

何れにしても一里塚の起原を慶長九年に於ける家康の事

業に歸する文献は、前記のやうな信長や秀吉に歸するものよりも遙かに確實性が多い。例へば築設の時期を明確に慶長九年二月四日から同年五月下旬迄としたり、築設事業を監督した奉行や總督の氏名も明記してあつたりするしまた江戸年寄、樽屋藤左衛門、奈良屋市右衛門が、この工事に参畫したことを記するなどは最も、自然にあり得べきことを記してゐるものと思はれる。

「註」樽屋、奈良屋の兩人は家康に従つて三河より江戸へ入國し、最初から江戸建設の事業に参劃し努力せる有力な町人であつて家康の信任も厚く、町人としては最上の特權も授けられてゐた功勞者である。今日の言葉で云へば、江戸都市計畫の功勞者であり土木事業などにも慣れてゐたであらう。兩人が、斯うした方面の事業に關係を有つに至るべきことは極めて自然の成り行きと考へられる。

(松平太郎「江戸時代」
制度の研究」参照)

その他「地方凡例録」や「當代記」には、一里塚の起原を慶長十七年秀忠の時代に歸する記事があり、⁽³⁾「雨窓閑話」

には三代家光の時代に記する記事があるといふが、それは恐らくは秀忠や家光が家康のこの遺業を擴張して、それまでまだ設けられてなかつた地方へ築設したことが起原として謬り傳へられるか、またはそれ等の書物の著者が年代に關して誤謬を犯したか何れかに因るであらう。

「註」(1) 「經濟史研究」二ノ五

(2) 「岡山縣通史」

(3) 「經濟史研究」二ノ五

こゝに考察の對照としてゐる一里塚の起原が家康の時代であり、そしてそれは後に述べるやうに當時に於ける交通上の必要に基いて設置されたものであるにしても、道路の里程を何等かの方法で標示することが、家康の獨創でなかつたことは云ふまでもない。日本に於ける一里塚の起原を信長に歸してゐるらしき「碩鼠漫筆」は其の遠き由來を支那の古事に求めて、

さて此一里塚は織田家や御當家の新義にあらず、漢土の古事に據られしより。……土塚は則一里塚にして、こは慶長九年より千餘年の古に係れり。但先是とあれ

ば、猶上古より有けるなるべし。

と云ひ、地史に現はれてゐる古代支那の土塚を紹介してゐる。

韋孝寬廢帝二年、爲雍州刺史、先是、路傍一里置一土塚、經兩頽毀、每須修之、自孝寬臨州、仍勒部內、當塚處、植槐樹代之、既免修復、行旅又得庇蔭……

支那の制度や施設が殆んど無批判に、直譯的に受け容られた上代日本の交通施設の中にもそうした古代支那の施設の反映が見出され得るであらうが、今それを充分に立證すべき資料を有ち合せない。たゞ王朝時代、現在の千葉縣香取郡中村の日本寺に在つた壇林を起點とせる里塚の跡として、同郡多古町染井に遺されてゐる遺址などは、それ等の觀點から、研究すれば興味深いものがあらうと思はれる。若し家康の前に信長や秀吉などが一里塚を築設したとすれば、それも決して彼等の純然たる獨創によるものではなく當時も何かさうした交通施設に關する傳統が傳へられてゐたことであらう。(つゞく)